



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究：現存遺品と円山派衣裳下絵との関係を中心に
Author(s)	植木, 淑子; 長崎, 巖; 福田, 博美; 両角, かほる; 菊池, 理予
Citation	服飾文化共同研究最終報告 2010 (2011-03) pp.9-16
Issue Date	2011-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10457/1197
Rights	

三井家伝来小袖服飾類に関する服飾文化史的研究
— 現存遺品と円山派衣裳下絵との関係を中心に —

A cultural and historical study on Kosode kimonos handed down in the Mitsui family
- Focusing on the relationship between existing kimono relics and
Maruyama costume sketches-

植木 淑子*¹⁺, 長崎 巖*²⁺, 福田 博美*³⁺, 両角 かほる*⁴⁺, 菊池 理予*⁵⁺,
Toshiko Ueki*¹⁺, Iwao Nagasaki*²⁺, Hiromi Fukuda*³⁺, Kahoru Morozumi*⁴⁺, and Riyo Kikuchi*⁵⁺

*1 文化学園服飾博物館 東京都渋谷区代々木 3-22-7

Bunka Gakuen Costume Museum

3-22-7, Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 共立女子大学 家政学部

Department of Apparel Science, Kyoritsu Women's University

*3 文化女子大学 服装学部

Faculty of Clothing Science, Bunka Women's University

*4 泉屋博古館分館

Sen-oku Hakuko Kan

*5 東京文化財研究所

National Research Institute For Cultural Properties, Tokyo

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : Kosode costumes handed down in the Mitsui family are thought to have been produced on the basis of sketches created by painters associated with the Maruyama school of traditional Japanese painting. Investigation of extant examples of kosode costumes and sketches involved in this study has come up with the following results.

The places of production, the methods of tailoring, and the textile techniques show features associated with the era between the end of the Edo Period and the Meiji Period. As regards the sketches, the signatures (the meaning of which is different from in the case of paintings, etc. since the signature is not that of the artist himself) and documentary records indicate clearly the involvement of contemporary painters belonging to the Maruyama school of painting.

Kosode costumes handed down in the Mitsui family may be considered to have been created with the involvement of painters in order to come up with new designs for kosode that differed from those that previously characterized these costumes, and they clearly incorporate design features associated with

*1) t-ueki@bunka.ac.jp

painting and images based on sketching from life that is a feature of the Maruyama school. The fact that the Mitsui family was a leading patron of the Maruyama school is closely connected to the background to which these designs came into being.

It has hitherto been thought that the kosode costumes handed down in the Mitsui family were created for use specifically by members of this family, but it became clear through this study that there are some extant examples, albeit few in number, of kosode costumes of similar type. This suggests the possibility that the kosode costumes handed down in the Mitsui family were not necessarily special items but were sold as commercial products.

要 旨

三井家伝来の小袖類は、江戸時代後期の富裕な町人女性の小袖を代表するものであり、円山派の絵師が描いたとされる下絵にもとづいて制作されたと考えられている。本研究は小袖と下絵の現存遺品を調査し、次の結果を得た。小袖類の生地・仕立て・染織技法は、江戸時代末から明治時代にかけての特徴を示している。また、下絵についても、落款や文献資料によって同時代の複数の円山派の絵師が関与していることが窺われる。

三井家伝来の小袖類は、それまでの小袖意匠に新味を出すために絵師を取り込んだと考えられ、絵画的な意匠構成や円山派の特徴である写生にもとづいた表現が顕著である。これらの意匠が生みだされた背景には、三井家が円山派の後援者であったことが深く関係している。従来、三井家伝来の小袖類は三井家の家内用として制作されたと考えられてきたが、少数ではあるが類似した小袖も現存することも明らかとなった。これらは三井家伝来の小袖類が特別なものではなく、商品としても販売された可能性を示している。

配当決定額

平成 20 年度	560,000 円
平成 21 年度	1,400,000 円
平成 22 年度	1,150,000 円
合 計	3,110,000 円

目 的

江戸時代の豪商として知られる三井家に伝来した小袖類は、江戸時代後期の富裕な町人女性の小袖を代表するものと考えられ、円山派の絵師が関わったとされる原寸大下絵との関係が注目されている。本研究は、現存遺品の調査によって三井家伝来小袖類の特徴を明らかにし、制作年代を特定する。そして、小袖の意匠と下絵、さらに円山派絵師との関係について言及し、三井家伝来小袖類が服飾文化史の中でどのように位置づけられるかを考察する。

研究の方法

三井家伝来小袖類は、文化学園服飾博物館と三井記念美術館に所蔵されている。洛東遺芳館には、三井家より柏原家に興入れした女性の小袖が所蔵され、これについても三井家伝来小袖の一連の小袖として扱った。また、研究の当初においては、原寸大下絵と関連をもつ江戸時代後期の制作と考えられる

小袖を対象としたが、明治時代の三井家当主夫人の着物やそれ以外の子供の振袖なども一括して三井家伝来の小袖類として捉えることとした。初めに、小袖類の生地・仕立て・意匠・染織技法の詳細な調査を行って特徴を明らかにし、制作年代を特定した。また、三井家伝来小袖と一般の小袖との関係を探るために、生地・意匠・染織技法が類似する同時代の小袖類の調査も行った。

三井家伝来小袖類に関連する下絵は、文化学園服飾博物館と兵庫・大乘寺に所蔵されている。研究を進めていく中で、嶋田家伝来の下絵(個人蔵)、京都国立博物館寄託(個人蔵)の工芸図案集も三井家伝来小袖と関係をもつことがわかった。これら4か所に所蔵されている下絵の調査を行い、小袖意匠との関係、制作者について考察した。

小袖と下絵の調査結果にもとづき、最後に三井家伝来小袖類の服飾文化史における意義について考察した。

研究の実施計画

平成 20 年度

小袖の調査:文化学園服飾博物館所蔵品、京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵品、奈良県立美術館所蔵品、京都府立総合資料館所蔵品(京都文化博物館管理)

平成 21 年度

小袖の調査:三井記念美術館所蔵品、文化学園服飾博物館所蔵品、福岡市博物館所蔵品、洛東遺芳館所蔵品

下絵の調査:大乘寺所蔵品、文化学園服飾博物館所蔵品、京都国立博物館寄託品(個人蔵)

平成 22 年度

小袖の調査:丸紅株式会社所蔵品、女子美術大学美術館所蔵品、国立歴史民俗博物館所蔵品、株式会社千總所蔵品

下絵の調査:個人蔵品

三井家関連文献資料の調査:公益財団法人三井文庫所蔵資料

小袖と下絵の調査結果にもとづき、三井家伝来小袖類の服飾文化史的意義についての考察

研究の成果

1 三井家伝来小袖服飾類の特徴

三井家伝来小袖服飾類は、様式の違いによって大きく二つに分類することができる。一つは総模様を中心とし、円山派の絵師が描いたとされる原寸大下絵と関係をもつ小袖類である。もう一つは、裾模様または襷模様で、明治時代の三井総領家の当主夫人が着用した着物類である。それぞれのグループの意匠・染織技法・生地・仕立てなどの特徴は次の通りである。

(1) 原寸大下絵と関係をもつ小袖類

文化学園服飾博物館に18領、三井記念美術館に5領、洛東遺芳館に7領が所蔵されている。これらは、北三井家、南三井家、小石川三井家に旧蔵されたものと、三井家より柏原家に興入れた女性の小袖である。

1) 意匠

総模様の構成は、小袖意匠にしばしば見られる散し模様によるものと、小袖全体を画面に見立て絵画的に構成しているものがある。モチーフは、松・竹・梅・四季の草花などの植物模様がほとんどで、鶴・

亀・小鳥・蝶などの動物、流水、御簾なども見られる。松竹梅は、通例では三種が組み合わされることが多いが、三井家の小袖の場合はそれぞれが単独で取り上げられ、きわめて絵画的な表現がなされている。また、草花は散し模様とされたり、風景の一部として構成されているが、円山派の絵画と共通する草花も多く、円山派の写生にもとづいた表現が顕著である。そして、一般に小袖模様として取り上げられない葉鶏頭、時計草、河骨、鹿の子百合、鉄線なども認められる。円山派の画風として、遠近感や奥行き感などの三次元的な空間表現をあげることができるが、これは風景模様によく表れている。一方、小袖の模様の中には、工芸に特有の装飾的な模様も見られ、円山派の写生的表現や三次元的表現と意匠化された模様とが組み合わされていることも特徴である。

2) 染織技法

刺繍を主とし、鹿の子絞り、摺箔や金砂子を併用するものもある。また、ごく一部ではあるが友禅染、描絵を併用したものもある。

刺繍にはきわめて多種の技法が見られ、これは写生的表現による模様を活かすための繡技と思われる。平繡や駒繡をはじめ、まつい繡、刺し繡、相良繡、芥子繡、菅繡、花の蕊や葉脈に施す上掛繡、さらに変り繡なども見られる。刺繍糸は、ほとんどが無撚りであるが、一部に撚糸や柰糸が使用されている。また、金糸駒繡のとし糸は赤が多いが、白、青、黒、緑も認められる。立体感を出すための肉入れもしばしば行われ、これには紙縫や紙、綿などが使用されている。

鹿の子絞りは、大小の粒を使い分けていることが特徴である。粒を1列に並べて線として表現する場合は小さめの粒、これに対して面を粒で埋める場合は大きめの粒を用いている。また、それぞれの粒の大きさが揃っていることも注目される。

摺箔や金砂子などをふんだんに用いることも、これらの小袖類の特徴である。すべての小袖類ではないがおよそ半数に摺箔や金砂子が施されている。

3) 生地と仕立て

原寸大下絵と関連をもつ小袖類の生地は、大部分が綸子で、これに次いで縹子が使用されている。縹子は、一般には紗綾形蘭菊を地紋とするが、三井家の小袖には、紗綾形蘭菊と共に鶴の丸紋、瑞雲が認められる。鶴の丸紋は三井家の替紋であることから、これに因むと考えられ、瑞雲についても他に例を見ないことから、これらは三井家独自の縹子であることが窺える。裏地については、紅平絹を通し裏とし、袖口布として紅縮緬を用いているものがほとんどである。また、掛襟を付けているものも半数近くある。

4) 制作年代

原寸大下絵と関連を持つ小袖について、刺繍における撚糸や柰糸の使用と多様な繡技、袖口布として縮緬を用いること、掛襟を付けることなどは、いずれも江戸時代末から明治時代の小袖の特徴を示している。

また、畳紙の墨書によって着用者が明らかとなった小袖が4領あり、これらは江戸時代末に着用されたことが窺える。墨書はいずれも「連観院」とあり、連観院とは北三井家9代当主高朗夫人・喜曾(1839-1883)の法名である。喜曾が結婚したのは安政6年(1859)であり、これらの小袖は結婚の際に着用されたと考えられる。また、喜曾については肖像画が残されており、三井記念美術館蔵の「波に柴舟模様小袖」はこの肖像画に描かれた小袖と一致する。

洛東遺芳館蔵の円山派衣裳下絵と密接な関係をもつ小袖類は、これまで文化6年(1809)に三井家より興入した女性のものとされてきた[参考文献1]。調査によれば、同年に三井家から柏原家に興入した女性は認められず、柏原家8代当主夫人・湧(1805-1867)は北三井家から文政5年(1822)に興入した。

また、9代当主夫人・賢(1852-1931)も北三井家の出身で、慶應2年(1866)に柏原家8代当主の養女となり、9代当主と結婚した。洛東遺芳館所蔵の小袖類は、刺繍や仕立ての特徴から類推すると、9代当主夫人・賢が着用した可能性がきわめて高い。

(2) 明治時代の着物

これに該当する着物は、三井総領家10代三井高棟夫人の苞子(1869-1946)が着用したもので、文化学園服飾博物館に21件、三井記念美術館に1件が所蔵されている。振袖と留袖とがあり、いずれも紋付の礼装用の着物で、明治20年代から30年代にかけて着用されたものである。

1) 意匠

模様配置は、裾模様と袂模様とがあり、いずれも裾の低い位置に置かれている。モチーフは植物、風景を主とし、鳥や虫が添えられているものもある。時代の流行を反映して小ぶりの模様が繊細に表現され、小さな単位模様を散らした構成も見られる。下絵が残されているものが多数あり、円山派の絵画の画題と共通する模様も見られる。畳紙の墨書によって下絵の制作者が明らかなのもあり、円山派の絵師である山本桃陽(生没不詳)が関わったことが窺われる。

2) 染織技法

糊防染による白上げに色挿しや刺繍を加えたものがほとんどである。刺繍糸として、平金糸を用いているものが見られ、平金糸を一針縫って点を表す繡法は、この時代の特徴である。友禅染によるもの、描絵によるものも少数見られる。

3) 生地と仕立て

縮緬が最も多く、薄くて柔かい縮緬の他に、やや硬い質感の壁縮緬も使用されている。その他に紋羽二重などもあり、夏物としては、紹、透綾がある。仕立てには、絹綿入、裕、単とがある。また、掛襟が付いているものが半数以上あり、内揚げをしているものも多く見られる。

2 下絵について

三井家伝来小袖と関連のある下絵については、1975年に『三井家伝来圓山派衣裳画』が刊行され、原寸大下絵26件が紹介された。そして、それらの多くが円山派の祖・応挙(1733-95)の画風ときわめて類似することが指摘されている。その後、1993年に北三井家所蔵の下絵類500点余りが文化学園服飾博物館に寄贈され、一部が展示と図録によって公開された。本研究においては、当初、この2種の下絵を研究の対象としたが、嶋田家伝来の下絵(個人蔵)、京都国立博物館寄託の工芸図案集(個人蔵)の存在を知り、これらも合わせて調査を行った。

(1) 三井家伝来の下絵

『三井家伝来圓山派衣裳画』に掲載の下絵について、同書に昭和35年頃までは北三井家の京都の蔵にあったと記されているが、調査によって北三井家10代当主・三井高棟(1857-1948)が円山派7代応祥(1904-1981)に譲ったことが明らかとなった。また、北三井家より文化学園服飾博物館に寄贈された下絵も、三井高棟が所蔵していたものであり、これら2種の下絵は密接な関係をもつ。

小袖の下絵は制作現場で使用されるものであり、これらの下絵も初めは呉服商「越後屋」の制作現場で使用されたと考えられる。それらを三井高棟が所有するに至った経緯は、調査によって次のように推察できる。三井家では、明治36年頃に家史を編纂するために各地にあった資料が北三井家に集められ、その際に制作現場にあった小袖の下絵も他の資料と共に北三井家の所蔵となった。三井高棟は円山派7代応祥を支援していたことから、下絵の一部が応祥に譲られ、残りは北三井家にそのまま保管され、文化学園服飾博物館に寄贈されたと考えられる。

1) 『三井家伝来圓山派衣裳画』に掲載の下絵

26 件を数えることができ、現在は兵庫・大乘寺と文化学園服飾博物館に所蔵されている(1 件は所在不明)。すべて原寸大で、25 件は小袖と同じ形状をなし、1 件は裾部分だけを前後一続きとしたものである。これらの下絵には 9 件を除き、越後屋三井の「越三」の墨円印が捺され、さらに番号が墨書されている。番号の最小のものは「十」、最大のものは「百拾七」であり、これらの下絵を一つのグループとすると、当初は少なくとも 117 件相当の下絵があったと考えられる。

下絵に描かれた模様はさまざまであるが、通例の小袖の模様と比較することによって、それぞれの用途を推定することができる。それによれば、26 領のうち 20 領は町方女子の小袖と考えられ、振袖で吉祥を意図した模様が多い。その他に、武家女性の小袖 3 領、子供用 2 領、能装束 1 領などがある。

下絵と現存する小袖との関係については、3 件の下絵が小袖の意匠とほぼ一致する。下絵の一部が小袖に取り入れられたものも 5 件見られ、下絵の一部を再構成して新しい意匠を生み出し、下絵が現存しない小袖についても元は下絵があったことが窺われる。

2) 文化学園服飾博物館に寄贈された下絵

多くは小袖類の下絵であるが、帯や袱紗の下絵、植物の写生なども含まれている。小袖類の中では、江戸時代後期の武家女性用小袖の小下絵が最も多く、これに次いで、江戸時代後期から明治時代にかけての小袖意匠の特徴を示す小下絵、原寸大下絵も多く見られる。そして、『三井家伝来圓山派衣裳画』に掲載の下絵と同様に「越三」の墨円印が捺されているものもある。また、同じ画題を扱ったものも見られ、掲載の下絵にしばしば見られる松、竹、梅、菊、杜若、藤、鶴、亀などのモチーフが、別の意匠として再構成されているものもある。

これらの中には、北三井家 10 代当主高棟夫人・苞子(1869-1946)の着物の下絵も含まれ、現存する着物と 11 件が関連する。また、墨書によって、高棟・苞子夫妻の子供たちの着物の下絵と認められるものもある。

これら一群の下絵の中で注目されるのは、わずかではあるが、「応陽」、「桃谷」、「桃陽」、「蟬水」、「玉章」、「江村」など制作者の名前が記されていることである。応陽(1868-1923)は円山派 6 代であり、山本桃谷(?-1890)、星野蟬水(1843-1902)、川端玉章(1842-1913)、江村隆章・隆夫は、いずれも円山派の流れを汲む絵師である。これらの絵師たちが三井家に入出入りしたことは文献資料[参考文献 2]によっても知られ、絵画の制作だけではなく、小袖の下絵制作にも携わっていたことが窺われる。

(2) 嶋田家伝来の下絵

嶋田家は、円山応挙の弟子の嶋田元直(1736-1819)の流れを汲む家系である。元直の後、雅容(生没不詳)、雅喬(?-1881)、武彦・義彦と続いた。この嶋田家には多数の円山派の粉本と、狩野派をはじめとする他流派の粉本が伝えられ、その中に小袖類の小下絵も含まれている。これらは近年までは嶋田家に伝えられたが、現在では個人の所蔵となっている。

小下絵は、小袖の輪郭の中に模様を描いたもの、裾部分のみの模様を描いたもの、モチーフとしての模様を描いたものなどさまざまであり、能装束の繡箔と思われる下絵も 1 件認められる。これらは、40×30cm 内外の和紙に描かれ、3 冊にまとめられている。それぞれの表紙には「第壹集 参拾参枚 島田蔵」、「第貳集 貳拾六枚 嶋田蔵」、「第参集 参拾四枚 嶋田蔵」の墨書が認められ、第参集の中の 2 枚には三井家伝来の下絵と同様に「越三」の墨円印が捺されている。また、生地や染織技法の書き込みも一部に認められる。この他に、主に有職文様を描いたものが 3 冊にまとめられ、その中にも小袖模様のモチーフが認められる。

これらの小下絵は、三井家伝来の小袖類や下絵と類似するものが多く見られる。小袖と一致するものが1件、小下絵とほぼ一致するものが2件、小袖や下絵の模様構成やモチーフと類似するものは20件余りにも及んでいる。「越三」の印が捺されている下絵もあることから、嶋田家が越後屋三井の小袖意匠に関わったことは明らかである。

(3) 京都国立博物館寄託の円山派工芸図案集

京都国立博物館には、南三井家伝来の円山派工芸図案集1巻が個人より寄託されている。この卷子についての詳細は明らかではないが、南三井家9代当主高德(1874-1937)は、円山応挙に私淑し、あらゆる伝手を求めて応挙関係の資料を収集したと伝えられ、これに関係するものではないかと考えられる。

この卷子(幅:27.4cm、長さ:443cm)は、図案を描いた小判の和紙を貼り込んで仕立てている。小袖類の下絵として12件が認められ、総模様4件、裾模様6件、模様のみ描いているものが2件ある。これらは、三井家伝来の小袖や下絵と一致するものはないが、モチーフ、構成、表現方法などにおいて類似性が認められる。

この工芸図案集には、櫛と盃の下絵も含まれている。これらの中には、嶋田家伝来の下絵と類似したものがあり、また、三井家伝来小袖にも類似した模様が認められることから、絵師が染織のみならず漆芸や陶芸などの分野にわたって意匠を考案している可能性も考えられる。

これまで下絵の制作者については、円山応挙とする説、応挙一門、少し時代が下って応挙の子や孫とする説があった。本研究においては、下絵の詳細な調査、三井家と円山派絵師との関係の調査によって、円山派5代国井応文、6代応陽、4代応立の弟子の星野蟬水、応挙の弟子の流れを汲む山本桃谷、桃陽、嶋田雅喬らが関ったことが窺われる。そして、制作年代は江戸時代末期から明治時代であり、これは下絵にもとづいて制作された小袖の制作年代とも一致する。

3 三井家伝来小袖類の服飾文化史的意義

本項では、本研究の過程で得られた成果に基づき、三井家伝来の小袖服飾類・着物類と、原寸大衣裳下絵及び小下絵(雛形図)、嶋田家伝来の小下絵(雛形図)との関連を文化史的に位置づけたい。

三井家伝来小袖服飾類は、その様式の違いから大きく二つのグループに分けられる。一つは円山派の画家によると考えられてきた原寸大衣裳下絵との密接な関係が指摘されてきた総模様を中心とする小袖服飾類、もう一つは、明治時代の三井家の当主夫人が着用したと伝えられる裾模様を主とする着物類である。これら両グループの作品のいくつかには、着物の制作工程において原寸大下絵制作の前段階で使用されたと考えられる小型の下絵や、さらにそれよりも前の段階で制作される意匠図(図案)、呉服注文の際に使用された雛形図と考えられるものも共に残っている。

このことから、まずはこれらの作品が、江戸時代後期から明治時代まで続く一般的な呉服制作のプロセスを経て制作されていたことがわかる。しかも前述の通り、原寸大下絵に捺されているのと同じ墨円印が総模様の小下絵だけでなく、裾模様の小下絵にも捺されているなど、意匠形式に外見上の違いはあっても、これら二つのグループは制作に関して同様の経緯を辿っていると考えられ、両者の間には相互に深い関連があると推測される。

これらのうち、原寸大衣裳下絵と関連を持つ三井家伝来小袖服飾類については、これまで江戸時代後期の富裕な町人女性の小袖服飾を代表するものであり、特にこれらは商品としてではなく、非売品(婚礼衣裳)として、越後屋三井において同家の女性のために特別に制作されたものと考えられてきた。しかし本共同研究における詳細な作品調査によって、これらの制作年代が江戸時代後期から明治時代前期にわたるものであることがわかった。また、他の美術館・博物館に所蔵されている同時代の小袖服飾類を調

査した結果、三井家伝来小袖服飾類と共通する特徴をもつ小袖を認めることができた。

このようなことから、裾模様を主とするグループだけでなく総模様を中心とするグループも、非売品としてごく少数制作されたのではなく、ある種の付加価値をもった高級なブランドとして制作されたと考えられる。またその中で、特に富裕な顧客層、あるいは三井一族を対象として、多くはないがある程度のまとまった数、比較的短い期間に継続的に制作されたのが、原寸大下絵を残す総模様系の作品であったと類推できる。

文化学園服飾博物館所蔵の小下絵に円山派六代応陽以下、明治時代前半期の円山派の絵師の名が見られることから、円山派の絵師が三井家と関係を持ち、着物の意匠制作に関っていたことが窺われる。また、円山派の絵師嶋田元直の流れを汲む嶋田家に伝来した小袖や着物の下絵に、文化学園服飾博物館及び大乗寺所蔵の原寸大下絵と共通する墨円印が捺されていることから、島田家が越後屋三井の小袖意匠制作に関っていたことが明らかである。

以上のことから、呉服商越後屋が商策の一つとして、円山派の絵師に下絵を描かせていたことは疑いないと考えられるが、それは越後屋のオーナーである三井家の当主が、ビジネスとしての呉服制作の一環として絵師を参画させたものと推測される。そこには絵師と三井家の当主との個人的な交友関係が基本にあるとしても、あくまでも時流を窺った商品開発の一環として考案されたもので、そのアイデアは明治時代前半期の千總などにも見られる。これまで、染織下絵への日本画家の登用は、千總におけるそれを嚆矢とすると考えられていたが、越後屋における円山派絵師の登用はそれに先立つものといえることができる。

当時の画壇において、円山派は他の流派に押されながらも、まだ主要な位置にあった。円山派に属する本格的な絵師に下絵を描かせていることから、絵師直筆の描繪小袖同様の個人的な人間関係が制作の背景にあるようにイメージしがちであるが、原寸大下絵に職人の親方、あるいは呉服専門の下絵職人によると思われる朱筆の直しが見られることなどから、雇用に関する力関係としては、むしろ呉服屋側に優越性があったと想像される。もちろん、本研究で対象としている三井家伝来小袖服飾類にあつては、小下絵のみでなく原寸大下絵も円山派の絵師が描いていることからすれば、そこには呉服下絵職人が日常的に携わっている小袖とは異なる価値観が求められていたことは明らかであり、これらが特別な高級なブランド品として位置づけられていたことは間違いないであろう。

主な発表論文等

長崎巖 「文化学園服飾博物館所蔵三井家伝来の小袖服飾・着物類の特徴」 展覧会図録『三井家のきものと下絵』文化学園服飾博物館編集・発行 2009

植木淑子 「三井家のきものと下絵 ―円山派がもたらしたデザインの世界― 展覧会にあたって」
同上書

参考文献

- 1 白畑よし・切畑健著 『三井家伝来圓山派衣裳画』 紫紅社 1965
- 2 財団法人三井文庫編集発行 『三井家文化人名録』 2002
- 3 三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編 『三井八郎右衛門高棟傳』 東京大学出版会 1899